避難生活(震災原発等)による小中学生の日常言語への影響
―福島県南相馬市小高区における言語意識調査―

小　林　初　夫
安　部　清　哉

論文要旨

本研究は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で、避難生活を強いられた小学校児童・中学校生徒が受けたであろう言語面への影響についてアンケート調査を実施し、言語形成期にあたる児童生徒が受けた言語の面での有形無形の影響を、部分的にでも記録しようとするものである。児童生徒が、避難生活前後において、各自の言語や周囲の言語の変化について、どのように受け止め、どのように感じたのか、主にその言語意識の側面に関する質問への選択回答形式と自由記載形式によってアンケート形式で調査した。調査対象は、福島県南相馬市の小学校 3 校、中学校 1 校で、2012 年 2 ～ 3 月の間に学校別に実施し、小学生計 57 名、中学生計 91 名、合計 148 名の回答を得た。それを、小・中別、中学の学年別、男女別、避難先の遠近別ほかの観点から分類して集計し、それぞれについて若干の分析と考察を行った。調査ということそのものの“難しさ”もあったが、幸い児童生徒の皆さんおよび関連諸方面のご理解とご協力をいただき、小さな調査ではあるが、前例のほぼない言語意識の記録を残すことができた。回答からは、避難生活後、友達の言葉が変化したと感じた児童生徒は、小学生で 29％、中学生で 41％、平均で 39％あり、言語形成期にある児童生徒の 5 分の 2 以上が、何らかのかたちで言葉への影響を被ったであろうことが推定された。また、複数選択回答式質問への避難先別平均回答率の相違からは、言葉がより異なる県外への避難を経験した児童生徒の方が、福島県内避難の児童生徒の場合よりも、より強く言葉（地域言語）を意識するようになった様子が読み取れた。

本研究は、「震災原発等による避難生活が言語形成期の児童生徒に及ぼす影響に関する調査研究」（学習院大学人文科学研究所の平成 24 年度特別共同研究プロジェクト、代表：安部清哉）の研究成果の一部である。

キーワード【福島県南相馬市、言語形成期、小学生中学生、避難生活、社会言語学】

1　はじめに

本研究は、学習院大学人文科学研究所「平成 24 年度（2012 年度後半期認可 PJ）　人文科学研究所特別共同研究プロジェクト」による研究成果として、東日本大震災が地域言語（方言）に及ぼした影響に関する調査データ（アンケート結果）を記録し、あわせて、地域言語の将来の担い手である言語形成期にある小中学生が避難生活で受けた言語的影響について考

察するものである。研究テーマは、「震災原発等による避難生活が言語形成期の児童生徒に及ぼす影響に関する調査研究」（代表：安部清哉）である。

2　研究の背景と調査目的

住民の大規模移動は、周辺も含む地域言語と文化の大規模な変容を生み出す要因となる。古くは応仁の乱による京都消失と東国人流入による京都方言の東国語化、データがある近年では、東京大空襲による伝統的東京弁の衰退、第二次大戦時の関東学童 500 名の白河市疎開による東京アクセントの消失等の調査がある。

避難・移動生活が、地域言語（方言）にどのような影響を及ぼすことになるか、ということは、貴重な地域文化の 1 つである方言の問題として、きわめて憂慮される問題である。また、言語研究上でも、いわば危機的外的条件を被った言語の問題としても看過できない。さらには、地域言語である方言がその一部を担っている地域文化にとっても、きわめて大きな問題と言えよう。

東日本大震災と方言に関する調査として、主に社会人を対象としたものは、文化庁や東北大学等によって多くの研究がすでに行われてきている。そこで、今回われわれは、まだ調査があまり行われていないと思われて児童生徒の言語に焦点を当ててみたいと考えた。本研究では、原発事故のために大規模避難を強いられた南相馬市を対象に、集団・分散などの種々の避難生活という事態が、特に今後の地域言語を担う言語形成期の児童生徒の言語意識と言語行動へ及ぼす影響について、社会言語学的観点から聞き取りやアンケート等を行って調査し、その影響を考察することを目的とした。特に、記憶が鮮明な早い段階での記録を残しておくことを優先させ、また、許される範囲でその分析を試みることとした。

ご推察いただけるように、内容的にも極めてデリケートな調査である。当該地域で長年に児童生徒への教育と地域言語の保全と学術的調査に従事してきた小林が関わることにより、同じ避難生活者という視線から、外部者では通常は容易に調査しにくい面や見落とされやすい心理的局面も考慮しながら実現できたものである。そのような点でも、貴重な言語記録として残すことができたと思われる。

3　調査方法と考慮事項

原発事故の避難指示で避難し、また、近隣まで戻ってきた児童生徒に、主にアンケート調査とインタビュー調査および学校等での観察を通して言語意識や言語行動を記録する方法をとった。対象は、南相馬市小高区の小学校児童および中学校生徒とした。アンケート調査をしてデータを得る方法も考慮するが、むしろ心理的負担を考慮し、数人毎ないし個別の聞き

取りで記録する方法も併用した。

避難先・避難期間による相違、避難先から戻ってきても元の学校には戻れず仮設校舎か他の学校に転入かによる相違、また、元の自宅に戻れず仮設住宅か借り上げ住宅かなどによる相違など、そのような調査が可能となれば、それらの相違による回答の違いにも注意を払った分析を行う。

可能な限り広く「避難生活を経験した子どもの言語意識」を記録しておくことに努めることで、貴重な記録資料となるよう考えた。

なお、調査計画を検討するにあたり、もっとも考慮したのは、未曾有の事故であるだけに、調査そのものが（調査された、回答したという記憶なども）児童生徒に及ぼす負担や影響、児童生徒の保護者家族や地域への心理的マイナスの負担になる虞れであった。震災後の初年度から耳に入ってきていたのは、様々なかたちや種々の性質の調査が多く被災地に入りこむようになり、そのこと自体が、地域の人たちへの様々なさらなる負担となっているということであった。また、調査に協力くださる関係機関やその関係者への負担や、社会的影響も最低限にとどめる必要があった。

そのようなことを可能なかぎり考慮したかったこともあり、アンケートでの質問項目数やその内容は、細部にわたったり深入りするような質問や記載事項は回避し、最小限にとどめることとした。中学生に対しては、より細かく設定したかった質問内容も、小学生との共通性を優先させるということもあるが、思春期にあることもあり、追加項目を設定することも特にしなかった。当初、小林の勤務先のこともあり、小学生を中心に調査内容の草案を検討したという事情もあったが、集計終了後の結果からは、中学生での回答がより多かったこともあるので、2、3項目でも中学生向けに質問項目を設定するという余地もあったかもしれない。より細かな内容に関する調査は面接調査などで、後で補っていくことを考えた。

後に示したアンケート内容をご覧いただくと、項目の少なさや質問が比較的一般的なレベルでとどまっていることを、もの足りなく感じる方もいるだろうと思われる（それはちょうど、昨今多くの大学で行われている授業に対する学生の「授業評価アンケート」の質問項目が表層的にも見える印象に、類似しているかのように思われてくる）。しかし、調査を依頼するわれわれとしては、この内容が現時点での質的限界と考えることとした。実際に、上記のように調査内容を抑制したつもりであっても、また、事前準備でも考慮して臨んだつもりではあっても、調査候補とした機関すべてでの調査が実現したわけではなかったし、それはまたやむを得ないことであった。

4　アンケート調査・聞き取り調査

4－1　アンケート調査内容

アンケート調査をしてデータを得る方法を中心とするが、児童生徒の心理的負担を考慮

し、数人毎ないし個別の聞き取りで記録する方法も併用した。

アンケート調査での聞き取り内容としては、当初、次の内容を検討した。

1　避難先で、ことば（方言）の違いを感じたか。

2　その時どう思ったか（避難先のことばをどう感じたか）。

3　その際にどうしたか（・避難先の方言を習得しようと努めたか？・あまり話さなくなったか？）

4　ことばで困ったことや、いやな思いをしたことはあったか。

5　避難先のことばに慣れるまで、どのくらいかかったか。

6　避難先のことばを使うようになったか。

7　地元に戻ってきても、避難先のことばを使うことがあるか。

8　地元に戻ってきて自分のことばは変わったと思うか。

9　友達のことばは変わったと感じるか。

10　避難を経験したことにより地元のことばに対する愛着はどのように変わったか。

記載事項には、学校、学年、性別、避難先、避難先での通学の有無などの欄を設け（後掲アンケート参照）、それらによる相違を考察できるようにした。また、避難先の遠近や、避難先の方言と福島方言との言語的相違（避難先が福島県内か、東北か、それ以外かなど）、避難期間による相違など、条件の相違による回答の相違にも注意を払った分析を行う。

可能な限り広く「避難生活を経験した子どもの言語意識」を記録しておくことに努めることで、貴重な記録資料となるよう考えた。

４－２　アンケート調査回答者・実施日

（1）　対象学校・学年・人数

今回、アンケート調査を行うことができたのは、福島県南相馬市小高区の以下の小学校児童 57 名と中学校生徒 91 名、合計 148 名である。当初、南相馬市小高区の全校を調査する予定だったが、被災の事情があり、下記以外の小学校 1 校は調査を行っていない。（括弧内は回答者数、男女別人数などは後掲の表参照）

○鳩原小学校　5 年生（6）・6 年生（3）

○金房小学校　5 年生（6）・6 年生（6）

○小高小学校　5 年生（23）・6 年生（13）

○小高中学校　1 年生（29）・2 年生（21）・3 年生（41）

（2）児童生徒の避難期間

児童生徒の避難期間は、短くて 1 カ月、長くて 1 年 5 カ月である。

（3）アンケート調査日時・場所・手順

○実施日　　小学校　2013 年 2 月（27 日依頼）、中学校　2013 年 3 月（3 日依頼）、それ

ぞれ後日回収。
〇実施場所　各小学校、中学校の教室
〇実施方法　各学校に調査票を持参して依頼。児童生徒に教室で配付し記入してもらい回収した。

4－3　聞き取り調査　(内容は後掲の附章９章参照)

ここでは、避難した児童生徒と保護者へ行った言葉に関する聞き取りの一部を記録しておく。聞き取りは、2013年3月から8月の間に、主に仮設校舎や仮設住宅において行った。録音しながら筆記し、後日、文字化した。文字化にあたっては、言葉に関係のない部分は省略した。また、プライバシーに配慮して削除した部分が多いことをご了承いただきたい。

〇実施日　　2013年3月から8月の間
〇実施場所　各小学校、中学校、集会所、仮設住宅。
〇実施方法　数人毎ないし個別に面接して質問し、録音しながら筆記した。
(内容は8章「おわりに」の後に「附章9章（資料編）」として掲載した。)

5　アンケート用紙

アンケートでは、多くのことを質問してみたかったが、調査内容がデリケートであること、中学生だけでなく5・6年生の児童に及ぶこと、小中学校とで統一的内容としておくこと、などを考慮し、また、関係協力機関からの理解を得やすい範囲にとどめることなども考慮し、最低限と考えられたごく簡略な内容にとどめておくこととした。

アンケート内容の全容と形式は以下の通りである。

：：

避難（ひなん）とことばについてのアンケート

学校　　　　年　　男・女

1　あなたの避難（ひなん）したところは、どこですか。　　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

(　　　　　　)県（　　　　　　　）市・町・村

2　そこの何という学校に、かよいましたか。

(　　　　　　　　　　　)学校

3　避難（ひなん）したところで、ことば（方言）のちがいを感じましたか。

(　)とても感じた　(　)少し感じた　(　)感じなかった

※次からの質問には、ちがいを感じた人（3 で「とても感じた」か「少し感じた」に○をつけた人）だけ答えてください。

4　ことば（方言）のちがいを感じたとき、どう思いましたか。
※○はいくつつけてもいいです。
（　）そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。
（　）そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。
（　）そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。
（　）自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。
（　）自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。
（　）自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。
（　）そのた〔　　〕

5　そこのことば（方言）に、なれるまで、どのくらいかかりましたか。
（　）1 週間ぐらい　（　）2 週間ぐらい　（　）1 か月ぐらい　（　）2 か月ぐらい
（　）3 か月ぐらい　（　）半年ぐらい　（　）そのた〔　　〕

6　そこのことば（方言）に、なれたとき、自分でも使うようになりましたか。
（　）使うようになった　（　）ときどき使うようになった　（　）使わなかった

7　南相馬にもどってきてからも、避難（ひなん）したところでおぼえたことば（方言）を使うことがありますか。
（　）よくある　（　）ときどきある　（　）ない

8　南相馬にもどってきて、自分のことば（方言）は変わったと思いますか。
（　）とても変わった　（　）少し変わった　（　）変わらない

9　南相馬にもどってきて、友達のことば（方言）は変わったと思いますか。
（　）ほとんどの人が変わった　（　）変わった人もいる　（　）変わらない

10　南相馬にもどってきた今、ことば（方言）について、どう思いますか。
※○はいくつつけてもいいです。
（　）地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。
（　）よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。

（　）自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。

（　）自分のふるさとのことば（方言）より、避難（ひなん）したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。

（　）そのた〔　　〕

11　避難（ひなん）したところで、ことば（方言）に困ったことや、はずかしい思いをしたことはありましたか。

（　）あった

※それは、どんなことでしたか。〔　　〕

（　）なかった

12　避難（ひなん）したところで、新しくおぼえたことば（方言）と、その意味を教えてください。

※たとえばこんなふうに書いてください。「やばつい＝ぬれて気持ちわるい」

13　そのほか、避難（ひなん）したところのことば（方言）について、気づいたことや思ったことがあれば、自由に書いてください。

◎これでアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。

―――アンケートは以上である―――

6　アンケートの集計結果と考察

アンケートの集計結果を、設問毎に、実数とパーセンテージにて集計した。表は、本論末に一括掲載してあるが、それぞれ、設問番号にしたがって解説と考察を加えていくことにする（各質問項目への回答結果の集計は、後掲の各表参照）。

なお、今回の回答者数は、表Ａに示したように、小学生 57 名、中学生 91 名で、合計 148 名（男子 66、女子 82）である（男女数は、表１－４参照）。

集計資料注

① 表Ａ～Ｃでは収集数内訳等を示した。

② 表中のグレー枠は、個々に、%、特徴的数値、全体数部分を見やすくするために便宜的に付した。

③ 表や自由記載欄の記録における「小高中Ｉ 23」等の注記（記号・番号）は回答用紙の整理上の記号である。

④ アンケートの集計には注意したが、種々の表を作成する過程で、無記入・無回答などの処理方針を途中で変更したことなどもあり、数字のずれ（合計欄や表の間での数字の若干の不整合）がまだ残っていることが懸念される。不足する数などがあれば、何らかの分類の算入漏れなどと思われる。

（1）設問３以降での避難先による回答の下位分類について

避難先が、福島県内か、福島県方言に方言分類上近似する北関東・東北地方か、それともそれ以外の地域かで、回答の傾向に相違が見られる傾向が見て取れたので、それを次のＩのように 1、2、3 の地域に区分した。また、この３分類域をまたいで避難している人も数は少ないが若干見られたので、それについては、結果的には数が少ないものであったが、IIのように、Ａ（1 地域と 2 地域）、Ｂ（1 地域と 3 地域）、Ｃ（2 地域と 3 地域）として区別してみた。そのようにして、避難先によって区別して集計した設問では、以下のように分類してある。

Ｉ　避難地域による３分類　　１域　「県内」――福島県内への避難
　　２域　「隣接東北」――東北６県および北関東（茨城・栃木・群馬３県）への避難
　　３域　「その他全国」――上記の２つの分類以外への避難

II　３分類範囲を超えた移動　Ａ（1 域＋２域）
　　Ｂ（1 域＋３域）
　　Ｃ（2 域＋３域）

1、2、3の地域の2つ以上にまたがって移動した人数は少なかったので、それについては、この3分類での集計では除外している。

（2）男女別集計

男女別での相違はあまり認められなかったが、中学生については男女別での集計を出してみた。やはり全体には相違がほとんど認めがたいが、若干の相違があった設問については個別に言及した。

（3）予想外であった設問設定上の課題

設問3のあとに、「※次からの質問には、ちがいを感じた人（3で「とても感じた」か「少し感じた」に○をつけた人）だけ答えてください。」と記したため、小学生ではそこからほぼ最後まで回答がなくなり、中学生でも、設問8まで回答がなくなっていた。当初、われわれは、設問6以降くらいから回答を再開してくれるだろうというくらいの意識で作成していたが、指示の仕方が不適切であり、かつ、特に小学生には明瞭ではなかったのは反省点である。（問8以降からはほとんどの中学生が再開してくれており、中学生の年齢位から社会人の文章表現の理解に近づいているのがよくわかった。）

以下では、設問毎にその傾向を考察する。設問毎の集計表を「表○＝設問番号―その下位番号」として示す。

6－1　設問1　あなたの避難したところは、どこですか。《表1－1～3》

県内での避難が約半分弱、県外への避難が約半分強であった。小中学校別、男女別についても集計しているが、全体としては男女間での大きな相違は認められなかったので、以後の分類では特に分けて集計していない。

6－2　設問2　そこの何という中学校に、かよいましたか。《表2－4》

避難先で通学した学校を回答してもらった。小学生では、学校毎での集計は略した。また、避難時の通学の有無は表に集計してある。中学1年生（新1年生にあたる）では、新しい中学校での受入れ準備が整わなかったという事情もあり、小学校に通ったという回答が、21名にも及んでいる。

6－3　設問3　避難したところで、ことば（方言）のちがいを感じましたか。
《表3－5、表3参考表》

（　）とても感じた　（　）少し感じた　（　）感じなかった

違いを感じたのは中学生に多く見られた（「とても感じた」「少し感じた」ともに中学生が多い）。中学生の方が、自己と周囲の言語に対する内省的意識が発達してきているためかと考えられる。

反対に、小学生は、その分、実際の生活場面で言葉の相違がそれなりにあっても無自覚的であり、影響の有無という点の確認調査は、実際の生活場面で直接観察したり、その場面で聞いたりしないかぎり、容易には確認できない面があることを示唆している。

避難地域の相違によって分類し、比較してみた（表３－３～5、および、表３の参考表。参考表は区分の仕方が異なる）。

小学生、中学生、さらに中学生の学年による相違毎に、「ことば（方言）のちがいを感じた」かどうかの傾向を見ると、次のような傾向が読み取れた。

○中学生の方が小学生より、言葉の相違を感じ取っている。

○中学生では、概略、学年が上がるに従って相違を感じる傾向が強くなる。

○小学生でも中学生でも、避難先が、県内よりもより距離が遠くなるほど、相違を感じる傾向が強くなる。

○中学生の男女間では、相違は見られない。

避難先が遠いほど相違を感じるというのは、母語方言との相違の大きさと直結する事柄であるので当然の結果でもある（地域を、単純に県内・県外に２分して示してある**参考表の表３－(1)**の方で見るとそれがよくわかる）。

表３－３以下を見ると、小学生においては、「福島県内」より「隣県東北」「その他全国」では「少し感じた」の比率が増えている。その小学生において「隣県東北」内では「とても感じた」が30％を超えているなど、方言的相違の大きさが言葉への意識へ影響を与えただろうことがうかがえた。

６－４　設問４　ことば(方言)のちがいを感じたとき、どう思いましたか。《表４－１～8》

選択肢からの複数回答可の設問で、自由記載欄を設けた。(「その他」とした自由記載欄の記載内容については、附章８章参照。)

全体としては、「ことば（方言）のちがいを感じた」とする回答は、予想していたよりも少なかった。避難先で、ことばの問題で困難を意識することは多くはなかった、ということと見ておきたい。

選択されている項目毎に比較すると、「そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。」を選択した数は、中学生よりも小学生に多かったことがまず目に付く。反対に、「そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。」という選択は中学生の方に目立つ。小学生の方が柔軟に対応しようとしているのに対して、言語形成期の終わり近くにある中学生

では自分の言葉への自覚意識が相対的に強くなり（他の回答からもそれがうかがえるが）、あまり他地域の方言を覚えたいという意識は生じなかった、と見ることができようか。小学生と中学生とで対照的な回答箇所であった。

地域別に見てみると、そのように、全体としては避難先の方言を「おぼえなくてもいいと思った」中学生であるが、より遠方へ避難した中学生では（福島県内より近隣東北、さらに「その他全国」）では、「少しずつおぼえようと思った」という選択が増加していくこと（2 → 3 → 8 名）が見てとれる（「おぼえようと思った」中学生 13 名のうち 8 名が「その他全国」避難者）。方言の相違が大きいほど、異なる方言になんとか順応しようとする意識の相違が、このようなところにうかがえる。

また、「少しずつおぼえようと思った」方が「おぼえなくてもいいと思った」人数を上回った小学生であるが、地域別にみると、「福島県内」「近隣東北」の場合はおぼえようと思った方が多かったものの、「その他全国」地域に避難した 20 名の中で見ると「おぼえなくてもいいと思った」人数が上回っていることがわかる。小学生では、中学生とは異なり（反対に）、方言差が大きくなるとむしろ、覚えるのが難しいと感じてしまうからであろうか。（この点は、次の設問 5 にて、小学生の方がなかなか避難先の方言に慣れなかった様子とも対応しているように思われる。）

なお、中学生の男女での相違は特に認められないようである。

6－5　設問 5　そこのことば（方言）に、なれるまで、どのくらいかかりましたか。《表 5－1～5》

（　）1 週間ぐらい　（　）2 週間ぐらい　（　）1 か月ぐらい　（　）2 か月ぐらい

（　）3 か月ぐらい　（　）半年ぐらい　（　）そのた〔　　〕

中学生では、2 週間ぐらいという回答が 3 分の 2 と多いが、一方、小学生は 8 割が 1 ヶ月とあり、さらに長期間の選択している人も少なくない。小学生の方が慣れるのに困難を感じることが多かったようである。この点と設問 4（6－4）とを考え合わせると、小学生の方が方言の相違から受けたであろうストレスは、中学生よりも大きかったことが推定される。

一方、中学生における「その他」の 16 名の内訳を見ると、「7　自由記載欄での回答」に掲載したように、（最後まで）「慣れなかった」とするものが 4 名もあり、個人差が大きかった様子がうかがえる。小学生における「2 か月ぐらい」以上とした人数も 4 名あり、大多数は上記の期間程度であっても、慣れるまで長期間かかっている場合もあること、および、その意識には個人差が大きいことが読み取れる。

また、中学生よりも慣れるまでの期間が長期的である小学生での地域別の傾向を見ると、興味深いことに、「その他全国」（1 か月以内のみ）よりも、「福島県内」「近隣東北」での方が長期になっている回答が多い。方言の相違が大きく違っていることを当然で仕方ないと受

容していく遠方よりも、類似度が高い近い方言での方が、むしろ違和感を長く引きずる傾向がある、ということであろうか。検討課題である。

6―6　設問６　そこのことば（方言）に、なれたとき、自分でも使うようになりましたか。《表６－１～5》

（　）使うようになった　（　）ときどき使うようになった　（　）使わなかった

小学生の方が中学生よりも、「ときどき使うようになった」という回答が多かった。

また、地域別にみると、「その他全国」へ避難した場合は、「ときどき使うようになった」比率が高くなっているようである。小学生では、さらに「近隣東北」でも「ときどき使う」率が、「福島県内」よりも多い。総体的には、方言の相違が大きい地域に移動した場合に、目新しさもあってか、あるいは、その土地に無意識にでも順応しようとするためか、その地域の方言を使うようになる傾向が見て取れる。

６－７　設問７　南相馬にもどってきてからも、避難したところでおぼえたことば（方言）を使うことがありますか。《表７－１～5》

（　）よくある　（　）ときどきある　（　）ない

小中別、学年、避難地域、男女別、いずれでも、あまり使うことはないようである。

６－８　設問８　南相馬にもどってきて、自分のことば（方言）は変わったと思いますか。《表８－１～5》

（　）とても変わった　（　）少し変わった　（　）変わらない

「とても変わった」という回答は多くないが、「少し変わった」というのは小学生では約４割、中学生でも約２割ある。小学生への影響がある程度うかがえよう。

地域別にみると、やはり地域差が見て取れる。「その他全国」へ避難した場合は、小学生も中学生でも、「少し変わった」の比率が他の地域への避難よりも高くなっている。さらに小学生では、「近隣東北」に避難した場合でも「少し変わった」が、「福島県内」よりも高い。この２つの特徴は、設問６で確認した「自分でも使うようになった」という回答の傾向と呼応している。

そのこととも併せて考えると、総体的には、方言の相違が大きい地域に移動した場合に、その言葉を強く意識し（また、その土地で「ときどき使うようになった」こともあって）、自分の言葉も変化したと意識している傾向が見て取れる。

6－9　設問９　南相馬にもどってきて、友達のことば（方言）は変わったと思いますか。《表９－１～3》

（　）ほとんどの人が変わった　（　）変わった人もいる　（　）変わらない

「変わった人もいる」という回答が、小学生で３割、中学生で４割程度ある。

興味深いのは、設問８の「南相馬にもどってきて、自分のことば（方言）は変わったと思いますか。」との比較である。小学生では大きな相違があるとは言い難いが（設問８の「少し変わった」が37％、設問９の「変わった人もいる」では29％）、中学生では、設問８の自分の方言については「少し変わった」が18％だったものが、設問９で「変わった人もいる」は41％と２倍の数値になっている。これは、自分はあまり変わったとは思わないものの、友人の言葉の変化は敏感に感じ取っていることを示している。自分の言葉は無自覚的であまり実際を正確に把握できないことを考えると、見方によっては、他者（友達）の言葉に対する観察の方がより現実を反映している可能性が高いとも解釈できそうである。少なくとも、設問８の数値よりも設問９の方が、児童生徒が受けた言語変化の一端を象徴しているよう思われる。

6－10　設問10　南相馬にもどってきた今、ことば（方言）について、どう思いますか。《表10－１～5》

複数回答可の設問で、自由記載欄を設けた（自由記載欄の記載内容については､7章参照）。

「地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。」という回答と、「自分のふるさとのことば（方言）はやっぱりいいものだと思った。」が多かった。避難することで、自分の故郷の方言に対する自覚を新たにしている。

「ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。」というのは、福島県内よりも、当然ながら、それ以外へ避難した人に多かった。

反対に、福島県内移住者では､「ふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。」という回答割合が、他の２地域に比してもっとも顕著であった。上記の点と対比すると、同じ県内の言葉の方が（県内への避難の方が)、精神的な安心感につながっていることが読み取れる。

また、いずれにせよ、言語形成期の児童生徒における、母語方言へのこのような自覚意識は、避難生活等何も経験しなかった他地域との比較で言えば、たとえ、方言（地域言語）に対してより強い愛着を形成するにせよ、共通語化を強く促す契機になるにせよ、言語形成上、おそらく何らかのかたちで影響を与えることにつながるであろうと推定されよう。

6－11　設問 11　避難したところで、ことば（方言）に困ったことや、はずかしい思いをしたことはありましたか。《表 11 －１～３》

「あった」と回答したのは、小学生２名、中学生５名（中二１名、中三４名）で、中学生では学年が上の方での回答が目立つ。また、男女差では、女子の方に「あった」とする回答がやや多い。設問３でも触れたが、女性であることや、年齢（精神年齢）が上の方であることなどもあり、言語への内省意識や言葉に関わる他者への意識が発達してくることが関係してきているのであろうか。

「あった」の回答において、記載されていた内容は、資料編として附章８（資料）に記載した。

※なお、設問 12・13 での自由記載については、設問４・５・10・11 の自由選択記載欄での回答とともに附章８章・９章（資料）を参照されたい。

7　おわりに

調査と集計を終えてみて、特に、設問４におけるマイナス面での回答が予想以上に少なかったことに、安堵した面があるのが偽らざる感想である。

自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。

自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。

自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。

設問 11 の「避難したところで、ことば（方言）に困ったことや、はずかしい思いをしたことはありましたか。」についても、同様で、「あった」と回答したものは、計７名だけであった。

また、それとは反対に、設問 10 では、出身地の方言をプラスに評価する回答が多かったことが対照的である。

よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。

自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。

このような、原発事故地域に限らず、震災被害地域における方言調査は、文化庁関係のものをはじめ、多く行われてきている。一方、児童生徒の使用言語（地域言語）に関する意識調査は、十分には把握していないが側聞する限りではまだ多くないようである。その意味でも、本研究は、限定的な小さな調査、しかも話者が自覚できる範囲での本人記載によるアンケート調査であったが、記録資料という面だけでも、一定の意義をもつものではないかと考える。

調査に協力してくれた児童生徒の、震災発生以前における言語状況を把握できる比較可能な資料はなく、避難前後での言語変化を客観的に比較することは難しい。その点でも、回答してくれた児童生徒の言語の今後の変化と震災避難生活との因果関係を、客観的に証明して

いく材料と方法には制約がある状態である。それだけに、この早い時期における意識調査は、今後、近隣の被害を受けなかった地域の言語変化などとも相対的に見ていく必要があろう。また、避難生活をおくらずに済んだ児童生徒の言語変化と比較対照していく場合などにも、貴重な材料を提供するものと思われる。

本稿では、時間の関係もあり、アンケートデータの集計と、自由記載・聞き取り調査などを記録し報告することに重点を置いたかたちとなった。作成した一連の表から読み取れることはまだあろうと思われるが、実際には、データの整理や表作成と点検に時間を取られ、表の分析や考察は十分に及ばなかった面もある。そのような面は、ご覧いただく方々が、提示したデータからお読み取りいただき、当該地域言語の今後のため、また、言語研究のために、活用していただければ幸甚である。

今後も、当該地域における移住・避難生活と地域言語の変化の問題について、調査と考察を継続していきたいと思う。

附章８章（資料篇）　自由記載欄での回答
―設問４・５・10・11 および設問 12・13―

７－１　設問４・５・10・11 の記載内容

設問 4・5・10・11 には記載欄がある。空欄以外、記載のあったものすべてを以下に列挙する。なお各行最初のローマ数字・アラビア数字等は整理上の分類番号である。

設問４　ことば（方言）のちがいを感じたとき、どう思いましたか。

＜小学生＞

小高小 6 年

・Ⅵ 10　そんなことは思わなかった。（特に何も思わなかった。）【児童の記載のまま】

＜中学生＞

小高中 2 年

・Ⅱ 16　感じなかった

小高中 3 年

・Ⅲ 14　めんどくさいから

・Ⅲ 20　特に気にならなかった

・Ⅲ 24　自然とおぼえた

・Ⅲ 25　勝手におぼえた

・Ⅲ 29　群馬の方言を話せるので、問題なかった。

・Ⅲ 30　何もおきなかった

・Ⅲ 31　かんじませんでした

設問 5　そこのことば（方言）に、なれるまで、どのくらいかかりましたか。

＜小学生＞（設問 5 への回答はない）

＜中学生＞（その他を選択しても、記載なしもある）

小高中 1 年

・Ⅰ 3　かからない

・Ⅰ 13　すぐに

・Ⅰ 22　3 日くらい

小高中 2 年

・Ⅱ 9　わからない

・Ⅱ 13　なれなかった

・Ⅱ 16　なれなかった

小高中 3 年

・Ⅲ 10　わからない

・Ⅲ 20　なれなかった

・Ⅲ 30　すぐに

・Ⅲ 31　なれません

・Ⅲ 32　知らない

・Ⅲ 35　自然と知らぬうちに自分も使っていた。

設問 10　南相馬にもどってきた今、ことば（方言）について、どう思いますか。

＜小学生＞

小高小 6 年

・Ⅵ 10　思わない。

＜中学生＞

小高中 1 年

・Ⅰ 9　方言を聞いていないので、分からない

・Ⅰ 13　特に、ない。

・Ⅰ 16　特にない

・Ⅰ 20　どうもおもわなかった。

・Ⅰ 23　あまり思わなかった

小高中 2 年

・Ⅱ 16　おなじ

小高中３年

・Ⅲ 14　正直どうでもいい

・Ⅲ 20　別になにも感じなかった

・Ⅲ 25　どうともおもわない

・Ⅲ 29　いろんな言葉を話せるのはいいと思った。

・Ⅲ 31　なにも思いません

・Ⅲ 40　ふつうでいいです。

設問 11　避難（ひなん）したところで、ことば（方言）に困ったことや、はずかしい思いをしたことはありましたか。　＊あった場合→※それは、どんなことでしたか。

＜小学生＞

小高小５年

・Ⅴ 9　南相馬の（ことを）いろいろ話したから

・Ⅴ 19　すごくなまっていて、意味があんまりわからなかった。

＜中学生＞

小高中２年

・Ⅱ 9　ことばが通じなかったこと。

小高中３年

・Ⅲ 15　なまりすぎ

・Ⅲ 23　自己紹介の時

・Ⅲ 26　言葉を発するときにこもってるといわれた。はずかしいことではないけどなおそうと思った。

・Ⅲ 38　イントネーションがおかしいって言われた。

７－２　設問 12・13 の自由記載内容

設問 12・13 には自由記載欄がある。その記載を、「なし、ありません、特になし」という記載と空欄以外で、記載のあったものすべてを、以下に列挙する。

設問 12　避難したところで、新しくおぼえたことば（方言）と、その意味を教えてください。（以下の＝右側の説明語も記載のまま）

＜小学生＞

小高小５年

・Ⅴ 8　N.S.　新しくおぼえたことばは、ありません。

・Ⅴ 10　M.T.　おぼえてない

・Ⅴ 14　S.Y.　とうきび＝とうもろこし

・Ⅴ 17　H. K.　「だいじ＝大じょうぶ」
・Ⅴ 18　U. K.　発音のしかたがちがった
・Ⅴ 19　E. C.　あめっこ＝あめ　しるっこ＝みそしるなど
・Ⅴ 21　M. Y.　わすれました。

小高小 6 年

・Ⅵ 2　M. S.　方言ではなく、イントネーションのちがいが大きかった。
・Ⅵ 10　I. K.　忘れました。
・Ⅵ 13　W. M.　そうなん？＝そうなの？

鳩原小 6 年

・Ｐ 63　A. K.　ばっけ＝ふきのとう

＜中学生＞

小高中 1 年

・Ⅰ 4　～け＝言葉の最後に「け」をつける。
・Ⅰ 11　せすけねえ＝別に気にしない。
・Ⅰ 13　～だばい。（意味はわからない）
・Ⅰ 22　「だいじ？＝だいじょうぶ？」

小高中 2 年

・Ⅱ 10　しゃしゃる＝でしゃばる
・Ⅱ 12　新潟の方言を忘れてしまった。色々あった。
・Ⅱ 13　せばさ＝だからさ　他はわすれた
・Ⅱ 14　～るん？＝～の？など
・Ⅱ 15　～なん？＝～なの？
・Ⅱ 20　おぼえてない

小高中 3 年

・Ⅲ 13　「しっせ」＝「しなさい」ぐらい。
・Ⅲ 14　だいじが？＝大丈夫か？
・Ⅲ 15　おもしくない＝おもしろくない　おもしい＝おもしろい
・Ⅲ 16　～け
・Ⅲ 19　なまら＝すごい
・Ⅲ 20　標準語を使っていた
・Ⅲ 24　おおばら＝部屋がすごく散らかってる　などなど
・Ⅲ 25　おぼえてない
・Ⅲ 26　ぶちゃる＝すてる　～らろ＝（語尾）
・Ⅲ 29　新しく覚えたものは無い。

・Ⅲ 31　　やばつい、シーサー、ボッコ→タ
・Ⅲ 35　　言葉の最後に「だ」をつける人が多かった。
・Ⅲ 36　　がんばっぺ＝がんばろう。
・Ⅲ 38　　おった＝おちた
・Ⅲ 39　　避難ではないけど、「おいでやす」＝来て～　みたいな。
・Ⅲ 40　　避難じゃないが、京都に行ったとき、「関西弁」を生できいた。
・Ⅲ 41　　～なん　ぐらい…

設問 13　そのほか、避難したところのことば（方言）について、気づいたことや思ったことがあれば、自由に書いてください。

＜小学生＞

小高小 5 年

・Ⅴ 15　K. A.　　ありがとうございます。
・Ⅴ 21　M. Y.　　それぞれ地方で方言はかわっていると思った。

鳩原小 5 年

・Ｐ 56　I. M.　　かんさいべんの人は言い方がきつかった。

小高小 6 年

・Ⅵ 2　M. S.　　相馬弁（浜通り弁）と会津弁のちょっとのちがいに気づいた。

鳩原小 6 年　　（記載のある回答なし）

＜中学生＞

小高中 1 年

・Ⅰ 8　　南相馬かとあまり変わらないことがわかった。
・Ⅰ 11　　おもしろいなと思った。

小高中 2 年

・Ⅱ 9　　自分はあんまりわからなかったけど友達からなまってるねとゆあれることが多かった。
・Ⅱ 11　　方言だと思っていた『～だべ』という言葉がつかわれていておどろいた。
・Ⅱ 12　　語尾に「れ」を使っていたのにびっくりした。
・Ⅱ 17　　イントネーションが全く違った。

小高中 3 年

・Ⅲ 16　　いわきに避難して、そこの方言を知ることができた。
・Ⅲ 20　　標準語を使っていた。
・Ⅲ 21　　方言というより、言葉の最後の所が違うだけだったから、話す

ときは普通に通じた。

・Ⅲ 22　福井は関西弁を使うんだとおどろいた。

・Ⅲ 25　おぼえると楽しい

・Ⅲ 26　方言がよくわからなくてどういう意味かきいたら【これは地元＝避難先＝の】「方言なんだ」とおどろかれて、ああそんなに地元【地元の住んでる人自身】ではちがいがわからないんだと思った。【論者の解釈】

・Ⅲ 29　初めて聞く言葉でも理解できるものだと思った。

・Ⅲ 36　福島とたいして変わらないとおもった。

・Ⅲ 40　ふつう。なまりない。

附章９章（資料篇）　避難生活中の言葉に関する聞き取り記録（小中学生・保護者聞き取り）

附章９－１　調査内容

避難した児童生徒と保護者へ行った言葉に関する聞き取りの一部を記録した。

児童生徒には、アンケート調査の項目にもあるが、「避難先で、ことば（方言）の違いを感じたか」どうかについて聞き、「感じた」と回答したときには、「どんなふうに感じたか」「どんなことば（方言）に違いを感じたか」と具体的に聞いた。保護者には、子どものことば（方言）の面で不安なことや困ったことがなかったかどうかについて聞いた。

附章９－２　調査時期・場所・方法

○調査時期　2013 年 3 月から 8 月の間

○場所　各小学校、中学校。集会所。仮設住宅

○方法　数人毎ないし個別に面接して質問し、録音しながら筆記した。

○アンケート調査後に戻ってきた児童生徒・保護者が含まれているので、アンケートの回答者とは異なる場合がある。

以下、児童生徒の学年、性別、避難先を示し、小学生、中学生、保護者の順で掲載する。

附章９－３　言葉に関する聞き取り記録

（1）小学生

①小５女（福島県いわき市）

○いわき市の言葉は小高の言葉と似てる感じがした。

②小６女（福島県福島市）

○小高の人としゃべるのは、福島市の人よりしゃべりやすい。

○福島市のときは少し言葉に気を遣った。

○福島市は小高より都会だから緊張する。

③小６女（静岡県）

○田舎じゃないから、あんまりなまりとかもないから、しゃべりづらかった。

○小高のときは友達とかみんながなまってたし、それに慣れてたから、それが当たり前だと思っていた。

④小５男（新潟県燕市）

○言葉の違いを感じた。そこの言葉を覚えようと思った。覚えないと困るような気がした。そして覚えた。

⑤小５男（福島県伊達市）

○飯舘村～神奈川県相模原市～宮城県亘理町～福島県伊達市と避難していたけど、どこも言葉は違っていた。どんな言葉かは忘れた。

⑥小５女　（宮城県仙台市）

○「なまってるね」って言われた。

○「ごみなげて」って言ったら、「なげたらだめでしょう」って言われた。【論者注：「なげる」は捨てるの意】

⑦小５男（京都）

○最初、言葉って違うんだろうなって不安だった。

○京都の言葉はむずかしかった。意味のわかんない言葉があった。

○国語の本読みの発音が違っていた。自分が本を読むとき、笑われるんじゃないかという心配があった。

○京都の先生は（福島から来てるということで）僕にわかりやすくしゃべってくれた。（先生は）友達には普通に京都の言葉でしゃべっていた。

○お母さんにも京都では京都の言葉をしゃべってほしかった。

（2）中学生

①中３女（福島県福島市）

○言葉の違いを感じた。小高では、「なんとかだべー」って「べー」を付けるけど、福島市の学校では付けない。

○イントネーションも違っていた。

○福島市の言葉は標準語に近い。

○普段、「だべー」は自然に出る。慣れてるので使いやすい。

②中２女（福島県会津美里町）

○大人の人は、すごくなまってて、子どもにもなまってる人がいた。

○同級生になまりがすごい人がいて、言葉が全然、話してる意味がわからなくて困った。だんだん慣れてくると意味がわかってきた。

③中２女（福島県福島市飯坂）

○「なんとかだべー」をよく使う。地元の言葉が好き。慣れてるから、安心。

④中２女（福島県郡山市）

○なまりがなくて、都会のことば、標準語だった。

⑤中３男（群馬県前橋市）

○小高より標準語に近かった。最初、自分の言葉がわかってもらえるかなあと不安に思ったけど、だいたいわかってもらえた。

○群馬では、「してるん？」という言葉を覚えた。意味は「してんの？」。

⑥中１男（三重県津市）

○言葉が違っていた。

○イントネーションが違っていた。

○国語の本読みをしたとき、「なんで棒読みなの？」って言われた。

○机を持ち上げることを、「机をつる」って言うので驚いた。

○何か（道具）を持ってきて下さいと言われたとき、方言でわからなかった。

○言葉の違いを感じたとき、三重の言葉も覚えてみようと思った。

○三重もなまってるんだなあと思った。

⑦中３男（山梨県富士吉田市）

○言葉の違いを感じて、自分の言葉が伝わるか不安だったので、こっちの言葉をあまり使わないようにしようと思った。

○２週間ぐらいたって慣れてくると、そっちの言葉も少しずつ使うようになった。
○言葉のトーンが違っていた。
○「でしゃばている」を「しゃしゃっている」、「それで」を「ほいで」と言う。
○地元の言葉が好き。自分でもよく使っている。

⑧中２男（千葉県松戸市）

○言葉はきれいな標準語だった。なまってる人はいなかった。

⑨中３男（沖縄県）

○ぜんぜんわからなかった。標準語と使い分けている人に聞いて教えてもらった。言葉って統一できないのかなあと思った。

⑩中２女（福島県白河市）

○普通にしゃべってるのに「なまってる」と言われた。
○白河市は標準語に近かった。
○言葉を直そうとは思わなかった。南相馬から来た人がいたので、自然にしゃべろうと思った。「だべー」「だべした」も普通に使ってた。
○雪の日、道路がすべるときに何か言ったら「なにそれ、ちょーなまってる」と言われた。
○「なんとかだべー」って言うと、「なまってる」って言われた。

⑪中２女（福島県福島市）

○普通にしゃべってたら、「なまってるね」って言われた。でも気にしなかった。
○小高の言葉が好き。特にすきな小高の言葉は、「べー」や「べした」。これからも方言使っていきたい。

⑫中２女（静岡県清水市）

○静岡は標準語だったけど、自分は小高の言葉で話していた。

⑬中２女（栃木県）

○普通に話していて、「なまってる」って言われた。でも、自分の言葉でしゃべっていた。

⑭中２女（福島県二本松市）

○言葉の違いは特に感じなかった。

⑮中２年女（福島県郡山市）

○郡山はあまりなまってなかった。

⑯中２女（千葉県船橋市）

○普通にしゃべってるのに、「なまってる」って言われたけど、恥ずかしいとは思わなかった。方言が違うのは当たり前だから。

⑰中２女（群馬県前橋市）

○言葉の違いは感じたけど、なまってると言われたことはない。

○相手の言ってることがわからないことがあった。

○自分の言葉で自然にしゃべっていた。

○群馬もなまってたけど小高より標準語に近いような気がした。

⑱中２女（福島県川俣町）

○川俣はすごくなまっていた。「ランドセル」を「ガバン」と言っていた。

○川俣から帰ったとき友達に「なまってる」って言われた。

○買い物袋を「がさがさぶくろ」と言ったら笑われた。

⑲中２女（静岡県清水市）

○言葉がこっちにくらべて都会だなあと思った。

○言葉に濁点が付いてなかった。きれいな感じがした。だから、こっちの言葉でしゃべるとなまってるって思われるんじゃないかなあっていう心配はちょっとあった。

○自分ではなまってるほうだと思う。「何々だべー」なんてよく使う。

⑳中３女（山形県）

○小高より方言を多く使っていた。似たような（同じような）方言もあった。

○小高の言葉が好き。慣れてるから、緊張しないし。

㉑中３女（福島県伊達市保原）

○普通に小高で使ってる言葉でも意味が違ってた。「こわい」。疲れたの意味で使ってた。恐ろしいの意味しかないと思ってたら。（同席していた別の生徒『うちでは「疲れた」の意味で使ってるよ。小高でもそういう意味で使ってるよ』）

○小高より方言をいっぱい使ってた。

○おもしろそうな方言は自分でも使ってみた。「だいじ」。意味は「大丈夫」。こっちに帰っ

てきても使ってる。

○大阪に避難して戻ってきた友達は、誰かにしゃべれって言われたときは、大阪弁をしゃべるけど、普段は小高の言葉を使っている。

（3）保護者

①小学生の母親（福島県郡山市）

言葉の面で不安はありましたか？

○危ないときとか、助けてほしいときには、思わず相馬弁が出ちゃうと思うんですけど、そういう、とっさのときに通じるのかなあと少し心配だった。

　それから、アクセントですね。どこか遠くへ行ったとき、アクセントで、もしも福島ってわかったら、差別されるんじゃないかなあとか。違う目で見られるんじゃないかなあって。私は耐えられるけど、子どもだったら、いじめとかのけものにされたりとか…。県内だったらまだね。なんとかね。大丈夫かなっていうのもあって、郡山にいたんですけど。

方言で笑われるかもしれないっていう心配はありましたか？

○ありますよ。東京や大阪に行ったときとか、よくふり返られる。自分は違うんだなあってすごく感じます。

そういうときに言葉を変えようとしますか？

○いいえ。そのまま相馬弁のまんまです。別に恥ずかしいことではないので。

学校の子どもの言葉で心配なことは？

○関西とかはぜんぜん言葉が違うじゃないですか。そっちの学校に転校したら、休み時間の会話とか遊びの言葉とかも違うと思うので、子どもは不安だろうなあって思いました。

郡山で言葉で困ったことは？

○相馬弁って語尾が強いんだと思うんですよ。よく旦那といっしょに、「なんだべー、それなんとがだべしたー」「んだがー」なんて普通に言ってるのに、けんかしてると思われちゃうの。周りの人がきょとーんとして、「大丈夫？」みたいな。「違う違う、けんかじゃない。これ日常会話」って説明するけど。遠くから呼ぶときも「なーんだべ、こっちさ来たらいーべした」って呼ぶので、怒ってるように聞こえるみたいです。それから、「はー」ってよく使うんですけど、「時間だべしたはー」とか「帰っぺはー」って。そう言うと、「疲れてんの？」って言われることがあります。

②小学生の母親（京都）

○ 2 年居たけど、まったく私はダメでした。関西弁に慣れなかった。子どもたちは関西弁に慣れた。5 年生の子どもは慣れるまで時間がかかった。半年ぐらい。3 年生の子どもは慣れるのが早かった。「ママの言葉は普通じゃない」と言われた。「地元にいたら普通。関西にいるがら違うだけだし…関西弁も地元（福島）に行ったら普通じゃないんだよ」って教えた。戻ってきたら、すぐこっちの言葉に戻った。でもイントネーションは関西弁のまま。南（西）の方にはあまり行きたくない。言葉が通じないから。東北なら安心できていいけど。浪江の請戸から小高の飯崎に嫁に来た。請戸は荒っぽしいんです。浜なので。「授業参観で恥ずかしいからあまりしゃべんないで」って子どもに言われます。

③小学生の母親（宮城県仙台市）

○学校で「なまってるね」って言われて帰ってきた子どもに、「仙台だってなまりあるんだから気にするな」って言いました。方言もなまりも素のままで、普通にしゃべっていました。

④中学生の母親（三重県津市）

言葉で心配だったことは？

○三重はやわらかい言葉なので、子どもの言葉が荒く聞こえないかと心配でした。こっちの言葉は濁音が多いから。「だべー」とか濁音になるけど、三重は言葉の終わりに濁音がつかないから、きつく聞こえるんじゃないかなあ。

言葉の違いは感じましたか？

○関西弁ほどきつくはないんですけど、イントネーションがこっちと違うし、語尾を伸ばす感じがあって、最初聞いたとき、ふざけてるのかなあと思ってたら、大人の人もそういうしゃべり方をするから、あっ、ここはこういうしゃべり方なんだと思いました。学校の集まりに行ったときに先生のしゃべり方も語尾が伸びていました。言葉の最後に「にー」と付くことが多くて、「いっしょやにー」とか。テレビの CM でも。福島弁じゃなくて、がんばって標準語でしゃべってたつもりなんですけど、「違いますね」って言われると、「何が違うんだろう？」って思いました。

通じなくて困ったことは？

○おじいちゃん、おばあちゃんといっしょにいたんですけど、おじいちゃん、おばあちゃんの言葉が三重の人に通じないので、通訳みたいにしていたんですよ。大人は避難してるということもあるから、あまり外に出なくて、うちの中はずっと福島弁なんですけど、

子どもは学校に行ってるから、三重弁をしゃべるようになるって感じなんです。いつのまにかイントネーションが三重弁になっていたりとか。あと、子どもが学校で立って本読みをさせられたとき、「なんで棒読みなの？」って言われたそうです。三重と福島では本を読む感じが違うみたいですね。

アンケート集計表

集計資料注

①表Ａ～Ｃでは収集数内訳等を示した。

②表中のグレー枠は、個々に、％ないし全体数部分、または、特徴的数値（より薄いグレー）を見やすくするために便宜的に付した。

③「小高中Ｉ 23」等の注記（記号・番号）は回答用紙の整理上の記号である。

④集計には注意したが、種々の表を作成する過程で、無記入・無回答などの処理方針を変更したことなどもあり、数字のずれ（合計欄や表の間での数字の不整合）がまだ残っていることが懸念される。不足する数があれば何らかの分類の算入漏れなどと思われる。

表Ａ　回答者数

	学生数	%
小学５年 *	35	24%
小学６年 **	22	15%
中学１年	29	19%
中学２年	21	14%
中学３年	41	28%
計	148	100%

(* ５年生　金房６小高 23 鳩原６)
(**６年生　金房６小高 13 鳩原３)

表Ｂ　問３以降の回答再開数

問３以降の回答	小学生	中学生	計
問３の回答で記載中断　そのまま白紙	31	1	32
問３の回答で記載中断　問５から再開	0	1	1
問３の回答で記載中断　問７から再開	0	1	1
問３の回答で記載中断　問８から再開	1	32	33
問３の回答で記載中断　問 12 から再開	2	0	2
計	34	35	69

表C－1

小中学校　男女人数	男	女	計
小学生	22	35	57
中学生	44	47	91
計	66	82	148

表C－2

男女比（小学生）	実数	%
男	22	39%
女	35	61%
計	57	100%

表C－3

男女比（中学生）	実数	%
男	44	48%
女	47	52%
計	91	100%

表C－4

男女比（全体）	実数	%
男	66	45%
女	82	55%
計	148	100%

地域区分別人数　（3 区分分類）（地域区分をまたいで移動している人＝計 3 名＝は除外）

以下表 3 － 3 以降では、避難先によって分類する場合は、次の 3 つの地域別に集計した。

	1（福島県内）			2（東北 6 県と茨城栃木群馬）			1、2 以外のその他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
計	30	43	73	11	14	25	13	34	47

148 名から、移動がまたがって居る人 3 名を除外した計 145 名で示してある。

設問 1　（あなた避難したところは、どこですか。）

表 1 － 1　＊その他の内訳は表 11 の後の資料欄参照

避難先（小学生）		%	
県内	29	51%	（金房 4 小高 22 鳩原 3）
新潟	4	7%	（金房 0 小高 3 鳩原 1）
宮城	3	5%	（金房 2 小高 1 鳩原 0）
山形	2	4%	（金房 1 小高 1 鳩原 0）
茨城	0	0%	（金房 0 小高 0 鳩原 0）
その他（資料参照）	19	33%	（金房 5 小高 9 鳩原 5）
計	57	100%	

表１－２

避難先（中学生）		%
県内	41	45%
新潟	10	11%
宮城	0	0%
山形	1	1%
茨城	1	1%
その他（資料参照）	38	42%
計	91	100%

表１－３

避難先（全体）		%
県内	70	47%
新潟	14	9%
宮城	3	2%
山形	3	2%
茨城	1	1%
その他（資料参照）	57	39%
計	148	100%

設問２　（そこの何という小（中）学校に、かよいましたか。）

表２－１

通学（小学生）		%
通学した	51	90%
通学しなかった	3	5%
無回答	3	5%
計	57	100%

表２－２

通学（中学生）		%
通学した	80	88%
通学しなかった	1	1%
無回答	10	11%
計	91	100%

表２－３　中学１年の通学先

通学先		%
小学校	21	72%
中学校	1	4%
無回答	1	3%
不明	6	21%
計	29	100%

＊小学校に通学したのは中学１年のみ

表２－４

通学（全体）		%
通学した	131	88%
通学しなかった	4	3%
無回答	13	9%
計	148	100%

設問３ （避難したところで、ことば（方言）のちがいを感じましたか。）
表３－１

	ことばの違い（小学生）	%	ことばの違い（中学生）	%	ことばの違い（全体）	%
とても感じた	5	9%	12	13%	17	11%
少し感じた	18	31%	44	48%	62	42%
感じなかった	34	60%	35	39%	69	47%
計	57	100%	91	100%	148	100%

（金房 1 小高 2 鳩原 2）
（金房 4 小高 13 鳩原 1）
（金房 7 小高 21 鳩原 6）

表３－２

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
とても感じた	8	18%	4	8%	12	13%
少し感じた	21	48%	23	49%	44	48%
感じなかった	15	34%	20	43%	35	39%
計	44	100%	47	100%	91	100%

参考表 「2 区分－２区分方式」の区分集計（3 区分法とは別に試験的に、「県内・県外（→隣県東北＋その他）」の２区分法で修正したもの

設問 1 で「その他」でも、移動が福島県内のみなら「県内」にした。（設問 1 にて 2 箇所以上避難した人は避難先を問わず「その他」に分類されている）

この参考表における「2 区分法式」の集計では、2 箇所以上非難している人で、避難先が「東北・茨群栃」と「それ以外」の両方にまたがっている人は「それ以外」の方にカウントした。

表３－⑴　「県内－県外」の２区分

	県内（小学生）	県外（小学生）	県内（中学生）	県外（中学生）	県内（全体）	県外（全体）
とても感じた	0	5	0	12	0	17
少し感じた	6	12	13	31	19	43
感じなかった	24	10	30	5	54	15
計	30	27	43	48	73	75
とても感じた	0%	19%	0%	25%	0%	23%
少し感じた	20%	44%	30%	65%	26%	57%
感じなかった	80%	37%	70%	10%	74%	20%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表３－⑵　「県外」を「東北群馬栃木－それ以外」に２区分

	東北・茨城・群馬・栃木（小学生）	それ以外（小学生）	東北・茨城・群馬・栃木（中学生）	それ以外（中学生）	東北・茨城・群馬・栃木（全体）	それ以外（全体）
とても感じた	4	1	2	10	6	11
少し感じた	5	7	10	21	15	28
感じなかった	4	6	2	3	6	9
計	13	14	14	34	27	48
とても感じた	31%	7%	14%	29%	22%	23%
少し感じた	38%	50%	72%	62%	56%	58%
感じなかった	31%	43%	14%	9%	22%	19%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

「2 区分－ 2 区分方式」の区分集計

表 3 －⑶　県内 or 県外（中学学年別）

県内 or 県外（中学学年別）	県内（中学 1 年）	県内（中学 2 年）	県内（中学 3 年）	県外（中学 1 年）	県外（中学 2 年）	県外（中学 3 年）
とても感じた	0	0	0	4	4	4
少し感じた	6	0	7	7	9	15
感じなかった	11	8	11	1	0	4
計	17	8	18	12	13	23

表 3 －⑶　「県外」を「東北群馬栃木－それ以外」に 2 区分（中学学年別）

学年別（中学学年別）	東北・茨城・群馬・栃木（中学 1 年）	東北・茨城・群馬・栃木（中学 2 年）	東北・茨城・群馬・栃木（中学 3 年）	それ以外（中学 1 年）	それ以外（中学 2 年）	それ以外（中学 3 年）
とても感じた	0	1	1	4	3	3
少し感じた	3	2	5	4	7	10
感じなかった	1	0	1	0	0	3
計	4	3	7	8	10	16

表 3 － 3

3 区分地域内　滞在組　（以下の地域区分をまたいで移動している 3 名は除外）

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
とても感じた	0	0	0	4	2	6	1	10	11
少し感じた	6	13	19	4	10	14	7	21	28
感じなかった	24	30	54	3	2	5	5	3	8
計	30	43	73	11	14	25	13	34	47
とても感じた	0%	0%	0%	37%	14%	24%	8%	29%	23%
少し感じた	20%	30%	26%	36%	72%	56%	54%	62%	60%
感じなかった	80%	70%	74%	27%	14%	20%	38%	9%	17%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表３－４
３区分地域内　滞在組　（以下の表３－５に示した、地域区分をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2以外のその他全国		
	県内（中学1年）	県内（中学2年）	県内（中学3年）	隣県東北（中学1年）	隣県東北（中学2年）	隣県東北（中学3年）	その他全国（中学1年）	その他全国（中学2年）	その他全国（中学3年）
とても感じた	0	0	0	0	1	1	4	3	3
少し感じた	6	0	7	3	2	5	4	7	10
感じなかった	11	8	11	1	0	1	0	0	3
計	17	8	18	4	3	7	8	10	16
とても感じた	0%	0%	0%	0%	0%	14%	50%	30%	19%
少し感じた	35%	0%	39%	75%	33%	72%	50%	70%	62%
感じなかった	65%	100%	61%	25%	67%	14%	0%	0%	19%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表３－５
３区分地域外　移動組（小学生３名）＊中学生該当者なし

	A（1＋2移動）			B（1＋3移動）			C（2＋3移動）		
	県内＋隣県東北（小学生）	県内＋隣県東北（中学生）	県内＋隣県東北（全体）	県内＋その他全国（小学生）	県内＋その他全国（中学生）	県内＋その他全国（全体）	隣県東北＋その他全国（小学生）	隣県東北＋その他全国（中学生）	隣県東北＋その他全国（全体）
とても感じた	0	0	0	0	0	0	0	0	0
少し感じた	1	0	1	0	0	0	0	0	0
感じなかった	1	0	1	1	0	1	0	0	0
計	2	0	2	1	0	1	0	0	0
とても感じた	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
少し感じた	50%	0%	50%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
感じなかった	50%	0%	50%	100%	0%	100%	0%	0%	0%
計	100%	0%	100%	100%	0%	100%	0%	0%	0%

表３－６
３区分地域外　移動組：中学学年別　＊中学生該当者なし

	A（1＋2 移動）			B（1＋3 移動）			C（2＋3 移動）		
	県内＋隣県東北（中学1年）	県内＋隣県東北（中学2年）	県内＋隣県東北（中学3年）	県内＋その他全国（中学1年）	県内＋その他全国（中学2年）	県内＋その他全国（中学3年）	隣県東北＋その他全国（中学1年）	隣県東北＋その他全国（中学2年）	隣県東北＋その他全国（中学3年）
とても感じた	0	0	0	0	0	0	0	0	0
少し感じた	0	0	0	0	0	0	0	0	0
感じなかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0

設問４　（ことば（方言）のちがいを感じたとき、どう思いましたか。）
表４－１（表３－１から以下の参考まで抽出）

「ことばの違いを感じた」人	ことばの違い（小学生）	ことばの違い（中学生）	ことばの違い（全体）	%（小中合計）
とても感じた	5	12	17	11%（17／148）
少し感じた	18	44	62	42%（62／148）
何らかの「違いを感じた」人の合計	23	56	79	53%（79／148 名）
「ことばの違いを感じた」人／全体	40%（23／57 名）	62%（56／91 名）	53%（79／148 名）	
（対比）違いを感じなかった人　%	60%（34／57 名）	38%（35／91）	47%（79／148 名）	

＊設問３でとても感じた、少し感じたと回答した 79 名のみの回答・複数回答可

表４－２　設問３で「感じた」と回答した 79 名

	小学生	中学生	全体
そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。	4	2	6
そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。	14	13	27
そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。	5	29	34
自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。	6	11	17
自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。	4	3	7
自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。	0	3	3
その他	1	8	9

表４－３　中学生 56 名

中学学年別	中学１年	中学２年	中学３年	中学生
そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。	0	1	1	2
そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。	5	3	5	13
そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。	11	6	12	29
自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。	4	5	2	11
自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。	0	0	3	3
自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。	1	1	1	3
その他	0	1	7	8

表４－４　設問３で「感じた」と回答した 79 名

回答選択数	小学生	中学生	全体
1	13	43	56
2	9	13	22
3	1	0	1
4 以上	0	0	0
計	23	56	79

表４－５　中学生 56 名

回答選択数	中学１年	中学２年	中学３年	中学生
1	13	9	21	43
2	4	4	5	13
3	0	0	0	0
4 以上	0	0	0	0
計	17	13	26	56

表４－６

中学男女別	中学男子	中学女子	中学生全体
そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。	1	1	2
そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。	8	5	13
そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。	13	16	29
自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。	3	8	11
自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。	1	2	3
自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。	2	1	3
その他	6	2	8

表４－７
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）

	1			2			1、2 以外の その他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。	1	0	1	0	2	2	2	0	2
そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。	3	2	5	6	3	9	5	8	13
そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。	1	9	10	2	5	7	2	15	17
自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。	0	2	2	3	1	4	3	8	11
自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。	0	1	1	1	1	2	2	1	3
自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。	0	2	2	0	0	0	0	1	1
その他	1	1	2	0	2	2	0	5	5

表４－８
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2以外の その他全国		
	県内 (中学1年)	県内 (中学2年)	県内 (中学3年)	隣県 東北 (中学1年)	隣県 東北 (中学2年)	隣県 東北 (中学3年)	その他 全国 (中学1年)	その他 全国 (中学2年)	その他 全国 (中学3年)
そこのことば（方言）を早くおぼえようと思った。	0	0	0	0	1	1	0	0	0
そこのことば（方言）を少しずつおぼえようと思った。	1	0	1	0	1	2	4	2	2
そこのことば（方言）をおぼえなくてもいいと思った。	5	0	4	3	1	1	3	5	7
自分のことば（方言）が、わかってもらえるか（つうじるか）不安に思った。	1	0	1	0	1	0	3	4	1
自分のことば（方言）が、笑われるのではないかと心配に思った。	0	0	1	0	0	1	0	0	1
自分のことば（方言）をなるべく話さないようにしようと思った。	1	0	1	0	0	0	0	1	0
その他	0	0	1	0	0	2	0	1	4

設問５　（そこのことば（方言）に、なれるまで、どのくらいかかりましたか。）
＊設問３でとても感じた、少し感じたと回答した 79 名のみの回答（小高中Ｉ 23　設問３で感じなかった、と回答しているが回答している）

表５－１

	小学生	%	中学生	%	全体	%
一週間くらい	5	22%	21	37%	26	32%
二週間くらい	9	39%	16	28%	25	31%
一か月くらい	5	22%	2	3%	7	9%
二か月くらい	1	4%	2	4%	3	4%
三か月くらい	2	9%	0	0%	2	3%
半年くらい	1	4%	0	0%	1	1%
その他	0	0%	16	28%	16	20%
計	23	100%	57	100%	80	100%

表５－２

中学学年別	中学１年	%	中学２年	%	中学３年	%	中学生	%
一週間くらい	5	28%	2	15%	14	54%	21	37%
二週間くらい	7	39%	7	54%	2	7%	16	28%
一か月くらい	1	5%	0	0%	1	4%	2	3%
二か月くらい	1	6%	0	0%	1	4%	2	4%
三か月くらい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
半年くらい	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
その他	4	22%	4	31%	8	31%	16	28%
計	18	100%	13	100%	26	100%	57	100%

表５－３

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
一週間くらい	9	30%	12	45%	21	37%
二週間くらい	10	34%	6	22%	16	28%
一か月くらい	1	3%	1	4%	2	3%
二か月くらい	0	0%	2	7%	2	4%
三か月くらい	0	0%	0	0%	0	0%
半年くらい	0	0%	0	0%	0	0%
その他	10	33%	6	22%	16	28%
計	30	100%	27	100%	57	100%

表５－４
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）

	1			2			1、2以外のその他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
一週間くらい	2	7	9	1	4	5	2	10	12
二週間くらい	2	1	3	2	3	5	4	12	16
一か月くらい	1	0	1	2	2	4	2	0	2
二か月くらい	1	1	2	0	0	0	0	1	1
三か月くらい	0	0	0	2	0	2	0	0	0
半年くらい	0	0	0	1	0	1	0	0	0
その他	0	4	4	0	4	4	0	8	8
計	6	13	19	8	13	21	8	31	39
一週間くらい	33%	54%	47%	12%	31%	24%	25%	32%	31%
二週間くらい	33%	7%	16%	25%	23%	24%	50%	39%	41%
一か月くらい	17%	0%	5%	25%	15%	19%	25%	0%	5%
二か月くらい	17%	8%	11%	0%	0%	0%	0%	3%	3%
三か月くらい	0%	0%	0%	25%	0%	9%	0%	0%	0%
半年くらい	0%	0%	0%	13%	0%	5%	0%	0%	0%
その他	0%	31%	21%	0%	31%	19%	0%	26%	20%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表５－５
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（中学1年）	県内（中学2年）	県内（中学3年）	隣県東北（中学1年）	隣県東北（中学2年）	隣県東北（中学3年）	その他全国（中学1年）	その他全国（中学2年）	その他全国（中学3年）
一週間くらい	1	0	6	1	0	3	3	2	5
二週間くらい	1	0	0	1	2	0	5	5	2
一か月くらい	0	0	0	1	0	1	0	0	0
二か月くらい	1	0	0	0	0	0	0	0	1
三か月くらい	0	0	0	0	0	0	0	0	0
半年くらい	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	0	1	1	1	2	0	3	5
計	6	0	7	4	3	6	8	10	13
一週間くらい	16%	0%	86%	25%	0%	50%	37%	20%	39%
二週間くらい	17%	0%	0%	25%	67%	0%	63%	50%	15%
一か月くらい	0%	0%	0%	25%	0%	17%	0%	0%	0%
二か月くらい	17%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	8%
三か月くらい	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
半年くらい	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
その他	50%	0%	14%	25%	33%	33%	0%	30%	38%
計	100%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

設問６　（そこのことば（方言）に、なれたとき、自分でも使うようになりましたか。）
表６－１　＊設問３でとても感じた、少し感じたと回答した 79 名のみの回答

	小学生	%	中学生	%	全体	%
使うようになった	2	9%	11	19%	13	16%
ときどき使うようになった	13	56%	15	26%	28	35%
使わなかった	8	35%	31	55%	39	49%
計	23	100%	57	100%	80	100%

（小高中Ｉ 23　設問３で感じなかった、と回答しているが回答している）

表６－２

中学学年別	中学１年	%	中学２年	%	中学３年	%	中学生	%
使うようになった	3	17%	1	8%	7	27%	11	19%
ときどき使うようになった	6	33%	4	31%	5	19%	15	26%
使わなかった	9	50%	8	61%	14	54%	31	55%
計	18	100%	13	100%	26	100%	57	100%

表６－３

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
使うようになった	6	20%	5	18%	11	19%
ときどき使うようになった	7	23%	8	30%	15	26%
使わなかった	17	57%	14	52%	31	55%
計	30	100%	27	100%	57	100%

表６－４
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）

	1			2			1、2以外の その他全国		
	県内 (小学生)	県内 (中学生)	県内 (全体)	隣県 東北 (小学生)	隣県 東北 (中学生)	隣県 東北 (全体)	その他 全国 (小学生)	その他 全国 (中学生)	その他 全国 (全体)
使うようになった	0	2	2	1	4	5	1	5	6
ときどき使うようになった	2	1	3	5	3	8	5	11	16
使わなかった	4	10	14	2	6	8	2	15	17
計	6	13	19	8	13	21	8	31	39
使うようになった	0%	15%	10%	12%	31%	24%	12%	16%	15%
ときどき使うようになった	33%	8%	16%	63%	23%	38%	63%	36%	41%
使わなかった	67%	77%	74%	25%	46%	38%	25%	48%	44%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表６－５
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2 以外の その他全国		
	県内 (中学1年)	県内 (中学2年)	県内 (中学3年)	隣県 東北 (中学1年)	隣県 東北 (中学2年)	隣県 東北 (中学3年)	その他 全国 (中学1年)	その他 全国 (中学2年)	その他 全国 (中学3年)
使うようになった	1	0	1	1	0	3	1	1	3
ときどき使うようになった	0	0	1	1	1	1	5	3	3
使わなかった	5	0	5	2	2	2	2	6	7
計	6	0	7	4	3	6	8	10	13
使うようになった	15%	0%	14%	25%	0%	50%	12%	10%	23%
ときどき使うようになった	8%	0%	14%	25%	33%	17%	63%	30%	23%
使わなかった	77%	0%	72%	50%	67%	33%	25%	60%	54%
計	100%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

設問７　（南相馬にもどってきてからも、避難したところでおぼえたことば（方言）を使うことがありますか。）

表７－１　＊設問３でとても感じた、少し感じたと回答した 79 名のみの回答

	小学生	%	中学生	%	全体	%
よくある	1	4%	5	9%	6	7%
ときどきある	6	26%	10	17%	16	20%
ない	16	70%	43	74%	59	73%
計	23	100%	58	100%	81	100%

（小高中Ⅰ 23　設問３で感じなかった、と回答しているが回答している）
（小高中Ⅲ 11　設問３で感じなかった、と回答しているが回答している）

表７－２

中学学年別	中学１年	%	中学２年	%	中学３年	%	中学生	%
よくある	1	6%	2	15%	2	7%	5	9%
ときどきある	2	11%	3	23%	5	19%	10	17%
ない	15	83%	8	62%	20	74%	43	74%
計	18	100%	13	100%	27	100%	58	100%

表７－３

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
よくある	3	10%	2	7%	5	9%
ときどきある	6	19%	4	15%	10	17%
ない	22	71%	21	78%	43	74%
計	31	100%	27	100%	58	100%

表７－４

３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している人は除外）

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
よくある	0	1	1	0	1	1	1	3	4
ときどきある	0	2	2	4	2	6	2	6	8
ない	6	11	17	4	10	14	5	22	27
計	6	14	20	8	13	21	8	31	39
よくある	0%	7%	5%	0%	8%	5%	12%	10%	10%
ときどきある	0%	14%	10%	50%	15%	28%	25%	19%	21%
ない	100%	79%	85%	50%	77%	67%	63%	71%	69%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表７－５

３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（中学1年）	県内（中学2年）	県内（中学3年）	隣県東北（中学1年）	隣県東北（中学2年）	隣県東北（中学3年）	その他全国（中学1年）	その他全国（中学2年）	その他全国（中学3年）
よくある	1	0	0	0	0	1	0	2	1
ときどきある	0	0	2	0	0	2	2	3	1
ない	5	0	6	4	3	3	6	5	11
計	6	0	8	4	3	6	8	10	13
よくある	17%	0%	0%	0%	0%	17%	0%	20%	8%
ときどきある	0%	0%	25%	0%	0%	33%	25%	30%	8%
ない	83%	0%	75%	100%	100%	50%	75%	50%	84%
計	100%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

設問８　（南相馬にもどってきて、自分のことば（方言）は変わったと思いますか。）

＊設問 4 以降回答していなかった小高中の生徒のほぼ全員 (小高中Ⅲ 34 以外）が、設問 8 からは回答を始めている小高小Ⅴ 20 も回答

表８－１

	小学生	%	中学生	%	全体	%
とても変わった	0	0%	1	1%	1	1%
少し変わった	9	37%	16	18%	25	22%
変わらない	15	63%	73	81%	88	77%
計	24	100%	90	100%	114	100%

表８－２

中学学年別	中学１年	%	中学２年	%	中学３年	%	中学生	%
とても変わった	1	3%	0	0%	0	0%	1	1%
少し変わった	2	7%	6	29%	8	20%	16	18%
変わらない	26	90%	15	71%	32	80%	73	81%
計	29	100%	21	100%	40	100%	90	100%

表８－３

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
とても変わった	0	0%	1	2%	1	1%
少し変わった	12	28%	4	9%	16	18%
変わらない	31	72%	42	89%	73	81%
計	43	100%	47	100%	90	100%

表８－４
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（小学生）	県内（中学生）	県内（全体）	隣県東北（小学生）	隣県東北（中学生）	隣県東北（全体）	その他全国（小学生）	その他全国（中学生）	その他全国（全体）
とても変わった	0	1	1	0	0	0	0	0	0
少し変わった	0	1	1	4	1	5	4	14	18
変わらない	6	41	47	4	13	17	5	19	24
計	6	43	49	8	14	22	9	33	42
とても変わった	0%	2%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
少し変わった	0%	2%	2%	50%	7%	23%	44%	42%	43%
変わらない	100%	96%	96%	50%	93%	77%	56%	58%	57%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表８－５
３区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している３名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2 以外のその他全国		
	県内（中学1年）	県内（中学2年）	県内（中学3年）	隣県東北（中学1年）	隣県東北（中学2年）	隣県東北（中学3年）	その他全国（中学1年）	その他全国（中学2年）	その他全国（中学3年）
とても変わった	1	0	0	0	0	0	0	0	0
少し変わった	0	0	1	0	0	1	2	6	6
変わらない	16	8	17	4	3	6	6	4	9
計	17	8	18	4	3	7	8	10	15
とても変わった	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
少し変わった	0%	0%	6%	0%	0%	14%	25%	60%	40%
変わらない	94%	100%	94%	100%	100%	86%	75%	40%	60%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

設問９　（南相馬にもどってきて、友達のことば（方言）は変わったと思いますか。）
表９－１

	小学生	%	中学生	%	全体	%
ほとんどの人が変わった	0	0%	0	0%	0	0%
変わった人もいる	7	29%	37	41%	44	39%
変わらない	17	71%	53	59%	70	61%
計	24	100%	90	100%	114	100%

表９－２

中学学年別	中学１年	%	中学２年	%	中学３年	%	中学生	%
ほとんどの人が変わった	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
変わった人もいる	15	52%	8	38%	14	35%	37	41%
変わらない	14	48%	13	62%	26	65%	53	59%
計	29	100%	21	100%	40	100%	90	100%

表９－３

中学男女別	中学男子	%	中学女子	%	中学生	%
ほとんどの人が変わった	0	0%	0	0%	0	0%
変わった人もいる	18	42%	19	40%	37	41%
変わらない	25	58%	28	60%	53	59%
計	43	100%	47	100%	90	100%

設問 10 （南相馬にもどってきた今、ことば（方言）について、どう思いますか。） ＊複数回答可

表 10－1

	小学生	中学生	全体
地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。	15	26	41
よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。	10	17	27
自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。	9	41	50
自分のふるさとのことば（方言）より、避難したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。	1	1	2
その他	1	17	18

表 10－1　回答選択数

回答選択数	小学生	中学生	全体
1	13	62	75
2	6	10	16
3	4	3	7
4 以上	0	0	0
計	23	75	98

表 10－2

中学学年別	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。	3	6	17
よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。	7	2	8
自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。	22	11	8
自分のふるさとのことば（方言）より、避難したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。	0	0	1
その他	5	4	8

表 10 － 2　回答選択数

回答選択数	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
1	23	18	21
2	4	1	5
3	2	1	0
4 以上	0	0	0
計	29	20	26

表 10 － 3

中学男女別	中学男子	中学女子
地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。	12	14
よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。	5	12
自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。	19	22
自分のふるさとのことば（方言）より、避難したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。	1	0
その他	9	8

表 10 － 4
3 区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している 3 名は除外）

	1			2			1、2 以外の その他全国		
	県内 (小学生)	県内 (中学生)	県内 (全体)	隣県 東北 (小学生)	隣県 東北 (中学生)	隣県 東北 (全体)	その他 全国 (小学生)	その他 全国 (中学生)	その他 全国 (全体)
地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。	3	6	9	7	5	12	5	15	20
よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。	1	4	5	5	3	8	4	10	14
自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。	3	21	24	4	4	8	2	16	18
自分のふるさとのことば（方言）より、避難したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。	1	0	1	0	0	0	0	1	1
その他	1	9	10	0	4	4	0	4	4
回答選択数（縦列小計）	9	40	49	16	16	32	11	46	57
※地域別平均回答選択数（回答選択数／人数）	平均 1.0 回答（計 49 選択 ÷49）			平均 1.45 回答（計 32 回答 ÷22 名）			平均 1.36 回答（計 57 選択 ÷42 名）		

※「地域別平均回答選択数」は、問 8 以降での回答人数で算出した（県内 49 名、隣県東北 22 名、その他 42 名、問 8 の集計参照）

この回答選択数の地域差からは、言葉がより違う県外への避難を経験した生徒の方が、福島県内避難の場合よりも、より強く言葉を意識している様子がうかがえる。

表 10 － 5
3 区分地域内　滞在組　（以下の分類をまたいで移動している 3 名は除外）：中学学年別

	1			2			1、2 以外の その他全国		
	県内 (中学1年)	県内 (中学2年)	県内 (中学3年)	隣県 東北 (中学1年)	隣県 東北 (中学2年)	隣県 東北 (中学3年)	その他 全国 (中学1年)	その他 全国 (中学2年)	その他 全国 (中学3年)
地方によって、ことば（方言）のちがいがあることを、はっきり感じた。	1	0	5	0	2	3	2	4	9
よそのことば（方言）を知ることができて、よかった。	3	0	1	1	1	1	3	1	6
自分のふるさとのことば（方言）は、やっぱりいいものだと思った。	13	4	4	2	2	0	7	5	4
自分のふるさとのことば（方言）より、避難したところのことば（方言）のほうが、いいと思った。	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	3	3	3	2	0	2	0	1	3

設問 11　（避難したところで、ことば（方言）に困ったことや、はずかしい思いをしたことはありましたか。）

表 11 － 1

	小学生	中学生	全体
あった	2	5	7
なかった	21	85	106
計	23	90	113

表 11 － 2

中学学年別	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
あった	0	1	4
なかった	29	20	36
計	29	21	40

表 11 － 3

中学男女別	中学男子	中学女子
あった	1	4
なかった	42	43
計	43	47

表のための資料Ⅰ　表１―１～３における避難先の「その他」の内訳（「ｋ5-6」等はアンケートの整理上の番号）

福島・新潟・宮城・山形・茨城以外、および、＊「福島・新潟・宮城・山形・茨城であっても２県以上移動している場合」（太字）

金房小＝＝ｋ5-4 群馬県草津町、ｋ5-6 福井県敦賀市、**＊ｋ6-2 福島県川俣町・群馬県草津町・栃木県那須町、ｋ6-3 山形県天童市・宮城県亘理町**、ｋ6-5 神奈川県横浜市。

鳩原小＝＝ｐ5-4 北海道江別市、ｐ5-6 福井県敦賀市、**ｐ6-1 福島県・埼玉県（市町村記入無し）**、ｐ6-2 福島県福島市・南相馬市、**＊ｐ6-3 山形県山形市・秋田県秋田市**。

小高小＝＝**＊ｖ-1 福島県郡山市・宮城県（市町村記入無し）**、ｖ-14 北海道札幌市、ｖ-15 千葉県松戸市、ｖ-17 栃木県那須塩原市、ｖ-18 神奈川県横浜市、ｖ-19 青森県弘前市、ｖ-22 千葉県（市町村記入無し）、vi-12 三重県津市、vi-13 群馬県前橋市。

小高中＝＝Ⅰ-18 愛知県あま市、Ⅰ-20 群馬県前橋市、Ⅰ-21 埼玉県加須市、Ⅰ-22 栃木県宇都宮市、Ⅰ-23 群馬県東吾妻町、Ⅰ-24 静岡県（市町村記入無し）、Ⅰ-25 千葉県船橋市、Ⅰ-27 千葉県勝田台、Ⅰ-28 群馬県太田市、Ⅰ-29 千葉県松戸市、Ⅱ-9 埼玉県鳩ヶ谷市・川口市、Ⅱ-10 山梨県富士吉田市、Ⅱ-11 神奈川県横浜市、Ⅱ-13 青森県弘前市、Ⅱ-14 群馬県前橋市、Ⅱ-15 埼玉県鴻巣市、Ⅱ-16 熊本県（市町村記入無し）、Ⅱ-18 千葉県新千葉、Ⅱ-20 千葉県成田市、Ⅲ-10 福島県福島市・伊達市、Ⅲ-13 福島県飯舘村・福島市・会津若松市、Ⅲ-19 北海道留萌市、Ⅲ-20 千葉県芝山町、Ⅲ-21 大分県臼杵市、Ⅲ-22 福井県敦賀市、Ⅲ-23 群馬県片品村、Ⅲ-25 群馬県吾妻町、Ⅲ-27 東京都あきる野市、Ⅲ-28 山梨県笛吹市、Ⅲ-29 群馬県太田市、Ⅲ-30 千葉県栄町、Ⅲ-31 新潟県・千葉県（市町村記入無し）、Ⅲ-32 群馬県綿貫町、Ⅲ-33 群馬県吾妻町、Ⅲ-35 長野県下諏訪町、Ⅲ-39　　神奈川県横浜市、Ⅲ-40 千葉県草刈、Ⅲ-41 群馬県東吾妻町。

表のための資料Ⅱ　表３以降の「３区分」分類における「その他全国」

３区分分類における「その他全国」（福島県内および隣県東北以外）

金房小＝＝ｋ5-6 福井県大野市、ｋ6-5 神奈川県横浜市

鳩原小＝＝ｐ5-4 北海道江別市、ｐ5-5 新潟県聖籠町、ｐ5-6 福井県敦賀市、ｐ6-1 福島県・埼玉県（市町村記入無し）

小高小＝＝ｖ-14 北海道札幌市、ｖ-15 千葉県松戸市、ｖ-18 神奈川県横浜市、ｖ-20 新潟県出雲崎町、ｖ-21 新潟県三条市、ｖ-22 千葉県（市町村記入無し）、ｖ-23 新潟県妙高市、vi-12 三重県津市

小高中＝＝Ⅰ-18 愛知県あま市、Ⅰ-19 新潟県豊栄市、Ⅰ-21 埼玉県加須市、Ⅰ-24 静岡県（市町村記入無し）、Ⅰ-25 千葉県船橋市、Ⅰ-26 新潟県聖籠町、Ⅰ-27 千葉県勝田台、

Ⅰ-29 千葉県松戸市、Ⅱ-9 埼玉県鳩ヶ谷市・川口市、Ⅱ-10 山梨県富士吉田市、Ⅱ-11 神奈川県横浜市、Ⅱ-12 新潟県三条市、Ⅱ-15 埼玉県鴻巣市、Ⅱ-16 熊本県（市町村記入無し）、Ⅱ-17 新潟県出雲崎町、Ⅱ-18 千葉県新千葉、Ⅱ-20 千葉県成田市、Ⅱ-21 新潟県出雲崎町、Ⅲ-19 北海道留萌市、Ⅲ-20 千葉県芝山町、Ⅲ-21 大分県臼杵市、Ⅲ-22 福井県敦賀市、Ⅲ-24 新潟県新発田市 ,Ⅲ-26 新潟県三条市、Ⅲ-27 東京都あきる野市、Ⅲ-28 山梨県笛吹市、Ⅲ-30 千葉県栄町、Ⅲ-31 新潟県・千葉県（市町村記入無し）、Ⅲ-34 新潟県見附市、Ⅲ-35 長野県下諏訪町、Ⅲ-37 新潟県柏崎市、Ⅲ-38 新潟県新潟市、Ⅲ-39 神奈川県横浜市、Ⅲ-40 千葉県草刈

関連文献

東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う，方言で救う――3・11 被災地からの提言――』ひつじ書房（センター代表：小林隆）

櫛引祐希子（2012）「方言による支援活動」『社会言語科学会　第 30 回大会発表論文集』

（戦中戦後の疎開生活と児童生徒の言語に関しては、国立国語研究所による白河市の子ども約 500 名への調査が知られている。移住による言語変容については社会言語学における多くの研究があるがここでは略させていただいた。北村甫（1952）「子どもの言葉は移住によってどう変るか」『言語生活』8 号　筑摩書房）

付記

本調査は、学習院大学人文科学研究所「平成 24 年度人文科学研究所特別共同研究プロジェクト」（2012 年度・後半期認可プロジェクト）による「震災原発等による避難生活が児童生徒に及ぼす影響に関する調査研究」（代表：安部清哉）の研究成果の一部である。全体に小林・安部とで相談しつつ進めたが、アンケートの依頼・回収および聞き取り記録とその文字化は小林が担当し、本稿本文作成と集計（表作成）は安部が担当し小林が点検した。

本プロジェクト遂行にあたり、前田直子氏（学習院大学・教授）に御高配いただき、また、稿を成す過程でもご助言いただいたことを記します。

謝辞

調査にあたり関係機関にご理解とご協力をいただきました。その一つ一つを記載すべきところですが、配慮する方面が少なくないと考え、今はそれをあえて略させていただきます。このご報告をもって謝辞に代えることをどうかお赦しください。

そのこととは別に、何より、アンケート記載や聞き取りに協力してくれた小学生・中学生のみなさん、また、聞き取りにおいてご協力下さった保護者の方々には、つらい経験に関わる内容であるにも関わらず調査の意味を理解してご回答いただきました。この場を借りて感謝の言葉を伝えたいと思います。おそらくまだ、他に類する調査がほとんどないものであり、みなさんのご協力で貴重な記録を後代に残すことができました。今後もまた教えていただくことがあるかもしれませんが、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

○　末尾になりますことをお許しください。

このたびの東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、被災された方々、いまでも避難生活を余儀なくされている方々に、一日も早い平穏な日々が訪れますことを願っております。

（個人的なことで恐縮ですが、小林も南相馬市小高区の自宅が原発 20 キロ圏内のため、避難指示が出され、着の身着のままで各地を転々と避難しました。現在、小高区は立ち入り禁止の警戒区域から、日中に限って出入りできる避難指示解除準備区域になりましたが、除染やインフラ整備が大幅に遅れており、現在も福島市で避難生活を続けております。）

ENGLISH SUMMARY

Impact on the ordinary language of elementary and junior high school students living as evacuees
（earthquake, nuclear power plant issues）
― Attitude survey in Odaka, Minamisoma City in Fukushima ―

KOBAYASHI Hatsuo, ABE Seiya

This research was based on a survey about the impact on the language of elementary and junior high school students who were forced to live as refugees in local or different prefectures after the earthquake on March 11, 2011. The survey was conducted in a questionnaire form that asked students, who were in a the formative period for personal language, about how they felt there had been changes in their or other people' s language since living as evacuees. Three elementary schools and one junior high school in Odaka, Minamisoma City in Fukushima were surveyed. The total response was one-hundred forty-eight including fifty-seven elementary school students and ninety-one junior high school students. The period of survey was from February 2012 to March 2012. The response was aggregated for the study by elementary/junior high school, school year, gender, and the distance of their relocation. This is an unprecedented record as a language survey of elementary and junior high school students influenced by the Great East Japan Earthquake. From the survey responses, students noticed that their friend's personal language had changed after living as evacuees: 29% of students noticed in elementary school, 41% in junior high school, and the average proportion is 39%. It appears that two fifths of students in the formative period of personal language development had their language affected in some way by their lives as evacuees.

Key Words: Fukushima, Language development stage, Life as an evacuee, Sociolinguistics , Elementary and Junior. High school students